

『ラジオと戦争 放送人たちの「報告」』

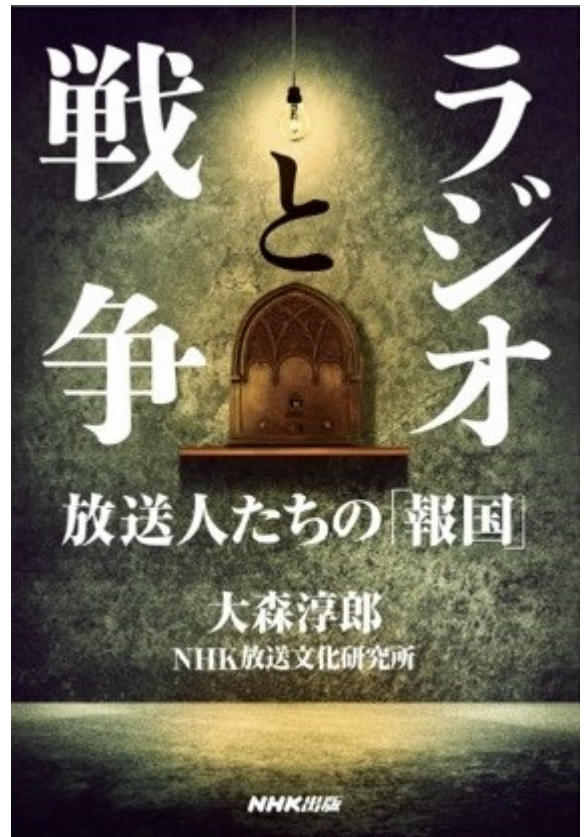
2023年06月26日 NHK 出版

概要

1925年に登場し、瞬く間に時代の寵児となったラジオ。そのラジオ放送に携わった人々は、ラジオの成長と軌を一にするかのように拡大した「戦争」をどう捉え、どう報じたのか、あるいは報じなかったのか。また、どう自らを鼓舞し、あるいは納得させてきたのか。そして敗戦後はどう変わり、あるいは変わらなかったのか――。

上記をテーマに、NHK放送文化研究所の月刊誌「放送研究と調査」は、2017年8月号～21年12月号で、5年にわたり「戦争とラジオ」を掲載した。その連載を単行本化したものが本書である。筆者の大森淳郎はNHKのドキュメンタリー番組のディレクターとして、戦争中のラジオについても長年取材を続けたのち、2016年～22年12月まで同研究所の特任研究員を務めた。

本書では、記者・ディレクター・アナウンサー…といった「放送人」たちが遺した証言と記録、NHKにある稀少な音源・資料などを渉猟し、丁寧にたどり、検証しながら、自省と内省の視点を欠くことなく多面的に「戦争とラジオ」の関係を追う。ひいては、非常時において、メディアに携わる者がどのように思考・模索し、振る舞うべきなのをも照射したノンフィクション。



【「序」より】

……夜空に浮かぶ月の表面は鏡のように平らに見えるが、実際は数千メートルの山々がそびえるクレーターだらけのでこぼこの世界だ。戦前・戦中の日本放送協会の歴史を遠望すれば、軍や政府に支配された、非自立的で没個性の、のっぺらぼうのような組織の姿しか見えない。でも、もっと接近して見れば、放送現場の絶望や葛藤、あるいは諦念といった感情の起伏が見えてくるのではないだろうか。そして政府や軍の指導を、放送現場がいつのまにか内面化し、ニュースや番組に具現化していったプロセスが浮かび上がってくるのではないだろうか。

現在の価値観から戦時ラジオ放送を断罪しようというのではない。いわば「仕方がなかった史観」を乗り越えて戦時ラジオ放送を検証すること。戦時中のラジオが何を放送していたのか、単にその事実を羅列するのではなく、現場が何をどう考えて、あるいは考えることを放棄して放送していたのかを検証すること。それこそが重要なのではないだろうか。

戦争協力は仕方がなかった。そこに止まっている限りは、戦時ラジオ放送の経験から学び、現在の放送に生かすことはできないだろう。(後略)

目次

序

- 第1章：国策的効果をさらにあげよ ー検証・戦時下ラジオニュース
第2章：前線と銃後を結べ ー戦時録音放送を聴く
第3章：踏みにじられた声 ー戦時ラジオ放送への道
第4章：日本放送協会教養部・インテリたちの蹉跌 ー講演放送・学校放送は何を伝えたのか
第5章：慰安と指導 ー放送人・奥屋熊郎の闘い
第6章：国策の「宣伝者」として ーアナウンサーたちの戦争
第7章：敗戦への道 ー「負け戦」はどう伝えられたのか
第8章：敗戦とラジオ ー何が変わらなかったのか
あとがき

著者情報

大森 淳郎 著

1957年埼玉県生まれ。1982年、東京外国語大学ヒンディー語学科卒業。同年NHK入局。富山、東京、広島、福岡、仙台の各放送局に勤務。ディレクターとして主にETV特集を手掛ける。作品にETV特集「モリチョウさんを探してーある原爆小頭兎の空白の生涯ー」(1993年)、同「祖父の戦場を知る」(2006年)、同「シリーズ BC 級戦犯 第二回“罪”に向き合う時」(2008年)、同「ひとりと一匹たちー多摩川 河川敷の物語ー」(2009年)、同「シリーズ戦争とラジオ 第一回 放送は国民に何を伝えたのか」(2009年)、同「敗戦とラジオ 放送はどう変わったのか」(2010年)など。

2016年からNHK放送文化研究所に研究員として勤務。2022年退職。

著書に『BC級戦犯 獄窓からの声』(日本放送出版協会、2009年)、『ホットスポット ネットワークでつくる放射能汚染地図』(講談社、2012年)。ともに共著。